

西川角

にしかわづの



東

川角と同じく、元々は「角」が「津野」であった。お遍路さんが四万十川を渡るのに都合の良い浅瀬があったことから「渡し場・港」を示す「津」の文字を使って「津野」という地名が付いたのではないかとされる。「角」になった経緯は不明である。

明治23年9月某日、四万十川流域を襲った大洪水は、他の地域同様、この西川角にも甚大な被害をもたらした。断続的な大雨により、上流で起きた土砂災害により数日間、渡りせき止められた四万十川が、とうとう決壊したのであった。午後2時頃、下流地域では雨も上がり、人々が各々に日常生活を再開し始めたところに突如として土石流が襲った。人も家も全てが流された。こんな逸話が残っている。その日、父親と「にこり汲み」に出かけた井上伝太郎という少年は、土石流にのまれた。村人たちが手分けして何時間も何時間も探し続けたが、いつこに見つからない。人々があきらめかけた頃、助けを求めた声は村人の頭上から聞こえた。伝太郎であった。大きな杉の木の高い高い枝に座って、流れてきた芋を食べながら救助を待っていたという。以後、彼は「川モクの伝さん」と呼ばれたのだそうだ。実在



集落を流れる水路は風情がある



再建された宝福寺

た「特別な学問を要する職業」の材を多く輩出しているのは、この寺子屋が事のはじまりである。しかし、このお寺は、明治はじめの「廃仏毀釈」政策によって壊滅寸前になってしまふ。そんな折に、前述の水害が起こるのであるが、その時に流された地区の氏神さまである天満宮を、この宝福寺の境内に移転することになり、天満宮とともに、消滅しかけていた宝福寺は、村人の手によって再建された。小さくても、丁寧に建てられたお堂は、村人の「学び」を支えてくれた寺子屋への愛着が伝わってくる。千年以上にわたって共存してきた神社とお寺を突如引き裂いた明治初期の政策であったが、一発の大水が縁結びとなり、今も仲良く並んで建っている。

の人物らしい。

さて、地区には弘法大師が開いたとされる「宝(法)福寺」というお寺がある。江戸期には開明的な人物によって寺子屋としての機能を果たした。この地区から医師や薬剤師といった

(4月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,756	3	男 5	12	41	31
女	9,869	-22	女 3	19	30	36
計	18,625	-19	計 8	31	71	67
世帯数	8,722	9	(4月中の届出)			

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	5月8日
リン酸	≤ 5.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.214
アンモニウム	≤ 5.0	0.127
アニオン活性剤	≤ 1.0	1.000
化学的酸素消費量	≤ 10.0	測定範囲以上

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●

※ 広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)